

中国河北農村における 民間信仰が無形文化遺産化される過程に関する一考察

—— 国家レベル無形文化遺産の武安難俗を事例として ——

白 松 強

BAI Songqiang

I はじめに

グローバリゼーションと近代化の時代と言われる今日、世界は文化、政治、経済、産業、軍事などが多様な方法で緊密に結びついており、この傾向は今後も加速するに違いない。そこでは主に経済、産業が世界的に拡大し、政治的関係が緊密化することで、国家や地域を超えたネットワークが形成され、それと平行して様々な国際的問題が発生する。この中で、とりわけ、地域のアイデンティティは多様な広がりを見せている。こうした潮流は、単に世界規模の変動を引き起こすだけではなく、そこに巻き込まれている各々の社会に少なからぬ影響を与える。そして社会ごとの自律性、安定性、一体性が揺らぎ、国家や地域、民族といった単位のとまりが以前ほど意味をなさなくなる。その結果、それぞれの社会の制度、慣習、生活様式、言語などの文化的側面も、多かれ少なかれ変化せざるを得ない（梶谷 2004：121-122）。

中国の状況も例外ではない。とりわけ、グローバル化した現在では、民族的な伝統文化や地方の特色的な民間文化は貴重な資源になっている。弱小の民族や辺鄙な地方に住んでいる人々は自らの特色のある文化を重視しはじめて、その文化を資源と資本として、文化の存続と発展を図っている。そもそも民間文化の遺産化とは何か。端的に言えば、政府機関に制定されることで、これまで、注目されることもなく主流的でもなかった地域の人々が創り、楽しみながら育んできた文化を遺産として保護するということである。文化遺産化はその民間文化の価値を高めることができ、しかも地位をも高める。特にもともとは全く価値がない、あるいは、愚かとさえも見なされた民間文化が文化遺産の地位に高められ、民族のアイデンティティのシンボルとして、人々から重要視され、保護を受けるようになる。従って、中国全土に及ぶ無形文化遺産登録のブームの中で、地方政府や有識者達が力を注いで、地域における特色や個性ある地域文化や民族伝統文化を掘り起こし、段々と変化させていく。文化遺産に登録されることによって、発展の機会や外来の援助を獲得するという方法は、すでに一般的・普遍的な方法になった（徐 2010：30-36）。遺産化の構築を経て、庶民の中で生まれ、民衆に広く親しまれてきた民間文化は、無名であったにもかかわらず、それが持つ特別な価値がはっきりと現れた結果、国家を代表する支流文化となった。この現象は、考えてみる価値があるに違いない。

民間文化は世間から再注目される中で、特に、民間信仰の扱いについての変化が非常に著しい。民間信仰はその土地の民衆生活の中で、彼らの精神を満たすことを目的として存在しているが、国家の

イデオロギーの管理とはまさに正反対になってしまう点から法律で禁じられている。無形文化遺産を効果的に保護するという背景の下で、民間信仰は遺産化の手段を通じてそのリスクを回避でき、存続や保護のチャンスを得ることができる。本論文は、中国華北の農村にある民間信仰活動が再構築された過程を考察することにより、現在の無形文化遺産の保護運動が、民間文化に及ぼした影響やその効果を明らかにできるのではないかと考えた。例えば、民間文化は、どうやったら無形文化遺産の保護対象になることができ、その存在を大いに高めることができるのか、当地の人々の生活にある伝統文化はどのように文化遺産になっていくのか、だれが策略を決めるのか、などの問題は今日でもまだそれほど注目されていない。また、本論も典型性が高い事例で諸学者の相関検討をふまえ考察してみるものである。例えば、RM キーシングがソロモン諸島の事例について、「誰が文化の意味を創って限定し、しかも、何の目的のために……という質問を我々は提出しなければならない……文化は歴史・経済・政治の面で因果関係の状態に置かれなければならない」（劉・王 1988：20）と述べたが、岩本通彌が既に指摘していたように、現在の無形文化遺産の登録方法は、属領主義ばかりに立脚し、「伝統」を見つけては、その伝統に純粋性を与えて、さらにその伝統を権威化にすることである。これは分析の対象としなければならない（岩本 2010：105-114）など。

儺俗「捉黄鬼」は、数百年の歴史を持つ河北省武安市固義村の民俗祭りである。ここ数年、儺文化の遺物である「捉黄鬼」が、その昔ながらの様式と豊富な内容で専門家や学者に重視されるようになり、2006年には、「捉黄鬼」は中国最初の国家レベルの無形文化遺産リストに登録された（魯忠民 2007）。本論はフィールドワークを中心に、現在でもあまり注目されない中国北部の河北省武安市の儺俗「捉黄鬼」を事例として取り上げ、儀式の過程を可能な限り詳細に記述することで、この民間信仰文化がどのように保存・発展・利用され遺産化されてきたのか、また文化の遺産化に際してさまざまな主体、すなわち国家や、地方の各級政府機関、有識者、都市住民、村落農民等の間でいかなるせめぎあいが見られたのか、つまり、民族の風俗習慣・生活文化がいかに遺産化され公共財として管理・運営の対象になってきたかについてもより掘り下げた検討を行い、文化人類学と民間信仰・宗教社会学のすべての観点から検討を加えて解明するとともに、民間信仰について遺産化とその背景にある当事者の動向が、幅広い民族・地域の事例から新たな展望を得ることを目的とする。

II 武安フィールドワークにおける儺俗の記録

武安市は中華人民共和国河北省邯鄲市に位置する県級市⁽¹⁾である。武安市には新石器時代早期の文化である磁山文化遺跡がある。紀元前 278 年に武安県が設置され、1949 年には武安県は河南省から河北省に合併された。

1988 年に武安県は県級市に改編され現在に至る。

固義村は武安市南東 2.5 キロメートル、山間地帯にある典型的な北方の漢民族が集まり住んでいる村落である。現在、村に 700 戸以上、常駐人口 2700 人余りが暮らしている。正月になると、故郷に帰ってくる浮動人口を含めても 3300 人余りといわれる。村人は大抵農業に従事している。耕地の栽培方式は伝統的な農作物の粟を基本としていて、「中国粟の故郷」と呼ばれている。

固義村は長い歴史を持っている。『武安県誌』に記載されたもので、村落の北側の仏堂寺院では、



図1 中国地図で見る河北省の位置



図2 河北省における衡水市の位置



図3 衡水市における武安市の位置



図4 武安市の行政区域

後周顯徳年間（954-960 年）から多くの僧侶及び住持が在籍していたことがわかる（武安県誌編纂委員会 1984）。閉鎖的で典型的な村落として、昔は、村のまわりに囲まれた2層の樓閣が6棟（南北に各々2棟、東西に各々1棟が配置されている）建てられていた。すべて村民の家屋はその6つの樓閣の内側に建てられ、夜になると、樓閣の門は閉められ、村全体は城のように閉め切られるので、防備作用がある。現在、樓閣は4棟だけ残っている。固義村の名前は何度か変更された。最初の名前は「固亦」といわれ、清朝時代では、「故亦」という名前に変わった。さらに民国12年（1923年）までには、「顧義」という名前に変わった。今は「固義」という名前と呼ばれている。

固義村の村民たちは強烈な汎神意識を持っているということである。南北に1キロメートル、東西に2キロメートルの面積を持っている固義村には、なんと大小ひっくるめて数十か所の寺と廟がある（李少林 2006：2）。

固義村に住んでいる住民は単一の宗族村落ではない。つまり、固義村の村落内部で若干異なる宗族共同体が存在しているということである。元々ここに住んでいる人家の苗字は何、董、安がある。明朝の時代には民族の移住に伴って、丁、劉、馬などの苗字の人々が山西省洪洞県から移動してきた。



図5 衛星写真で高度5 kmより見た固義村の鳥瞰図

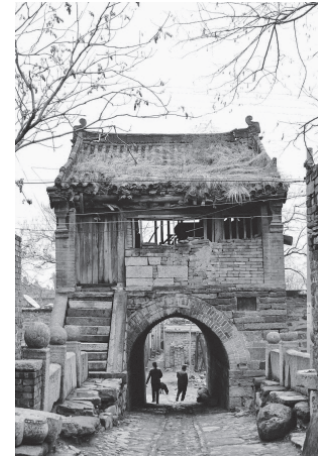


写真1 固義村の古い楼閣

固義村は苗字の区分とそれらが集中して居住していた位置から、西大社（西，丁・馬・何・董），劉莊戸（北，劉），東王戸（東，王），南王戸（南，王）という4つの区域に分けられる。儺俗「捉黄鬼」は、西大社，劉莊戸，東王戸，南王戸によって組織され，作業を行った（杜学徳 1994：76）。

（1） 固義村儺俗「捉黄鬼」の由来

儺は一種の文化現象として，「驅鬼逐疫」がその本質であり，人類の創始における超自然的な力に対する認識不足と鬼祇崇拜をその源とする（廣田律子 1997：3）。中国でいつから儺礼が行われたのか正確にはわからないが，少なくとも春秋時代以前から行われていたことは確かである（田耕旭 2004：197）。武安固義村の儺俗は中原儺の文化圏に属し，黄河流域の儺文化の典型的なものである。固義村の儺俗歴史の源流について，地方文献では記載がひどく乏しいし，固義村の儺俗を対象として研究する学者もあまりいない。口頭伝説からの由緒解釈も一致した結論に達することができない。それぞれの見解も分かれているが，その中で3つの説が流行しているようである。

①河北省の蔚県から個人渡來說

固義村の村民によれば，儺俗「捉黄鬼」は張家口市蔚県(3)の小五台山から伝わってきた。明朝時代の中ごろ，商売で蔚県を訪れた固義村の村民である丁端という人が，夢で固義村を守護する神様である白眉三郎から御啓示をいただいてから，蔚県の「捉黄鬼」と似たような街頭の宗教伝統劇を学んで故郷に持ち帰ったということのようである。しかし，現在の張家口市の蔚県にはこのような演目はない。

②山西省上党地区からの渡來說(4)

山西省上党地区に宗教儀礼に関する伝統演劇や世俗演劇が地方の人に喜ばれている。古い宗教演劇の特徴が顕著に残っている。1985年，この地方で明万暦2年（1574年）に写本された『迎神賽社礼節伝簿四十曲宮調』が重要な伝統演劇の歴史資料として発見された（黄竹三 1987：137）。脚本では，このような古い宗教演劇の演出目的，形式及び時間などについて詳しく記載されている。特に上党地区における宗教演劇「鞭打黄滂鬼（鞭で黄滂鬼をひっぱたくこと）」と固義村の儺俗「捉黄鬼」

は演出形式やストーリーなどもよく似ている。固義村は上党地区と隣接しており、一部の村民の先祖は、明朝時代の民族移動によって、固義村に定住した。移住の過程で、その土地の演劇文化を持ってきたということである（王福才 1995：50）。

③諸地域間の文化で構築される起源説

杜学徳⁽⁵⁾の調査研究によれば、邯鄲市から北東 15 キロメートルにある東填池という村落では、毎年⁽⁶⁾賽戯⁽⁷⁾を定期的に行っている。その演出内容や出演方式においても、固義村の賽戯と比較して、大体は同じだが、細かい点が違っている。例えば、両者は三国志の世界の「長坂坡（長坂の戦い）」、「三英戦呂布（3人の英雄たちが呂布と戦う）」などのプロットを舞台にしている。また、楚と漢の争い（項羽と劉邦の一連の戦い）や北宋の楊家将演義などの物語も定番となっており、老人から子供まで幅広く知られている。したがって、もともとは固義村には伝統劇の賽戯があり、その後、上党地方から宗教演劇「鞭打黄渤鬼」を取り入れて、地元の伝統劇の中にとけ込ませて、現在、固義儺俗「捉黄鬼」を形成していったと、杜学徳は率直に推理している。（杜学徳 2006：50）。

(2) 固義村儺俗「捉黄鬼」の演出過程

東漢の張衡は『東京賦』で大儺の様子がいきいきと描かれている。「……爾乃卒歲大儺，毆除群厲。方相秉鉞，巫覡操茆侏子万童，丹首玄制。桃弧棘矢，所爇無臬。飛礫雨散，剛瘳必斃。煌火馳而星流，逐赤疫于四裔。然後凌天池，絕飛梁。捐魑魅……」（……年末，大儺を行って，疫病の悪鬼を追い払う。儀式祭祀を行って方相氏は鉞を手に取り，巫覡は箒をあやつり，桃の木や棘で作った弓で矢を放ち，石礫をぶつけて，鬼を退治する。赤疫を四海に逐い，天池の橋を渡り，魑魅を殺し，悪鬼をうつ……）張衡は作品の描写を誇張しているが，大儺を行う時に湧き出てきた激しい情動に満ちた緊張感や激烈な雰囲気は真実である。固義村の儺俗「捉黄鬼」の演出も，凶暴さ，緊張感，激烈さ，奔放さを表すのに効果的に使われているという特徴があり，祖先伝来の東漢大儺の伝統の精神と豊かな風土を受け継いでいる。

固義村の儺俗「捉黄鬼」は規模の大きな民間信仰の祭祀活動と社火節として，1995 年以前では 3 年間連続して行った後で 3 年間の間隔をとっていたようである。村民の話によると，これは経費が原因のようである。1995 年の「捉黄鬼」では全国でも影響力が大きくなり，それ以降，毎年行うようになった。活動全体を計画実行する組織機構は西大社，劉莊戸，東王戸，南王戸という 4 つの村の⁽¹⁰⁾社首のもとで行われる。この中で，西大社の主をしている社首は丁，李，馬の 3 つの姓氏から選んだ 25 世帯で構成される。1 戸から 1 人ずつが担当する社首は任期制で，ある事情によって担当できない場合，声明して脱退することができる。代わりに担当したい世帯があれば，その世帯が社首を務める。「捉黄鬼」の演出経費はかつて村民から集められていた。各家からの募金は多くても少なくとも良く，不足分は社首たちが補填した。近年では，寄付する村民も多くなったし，企業のスポンサーもついた。また，市から補助金も受ける。経費の面で困ることは全くなかった。資金の収支状況を管理するために専門の管理人を配置しており，「捉黄鬼」の演出活動が終了すると，活動に関する経費収支の帳簿明細を壁に貼って，村民に公開しなければならない。

ここ数年，社首の総指揮を務めてきたのはずっと李増旺であった。李増旺の先祖たちもみな社首を



写真2 跳鬼・二鬼・黄鬼・大鬼（左から）

務めてきた。2008年2月、文化部は李增旺に「河北武安儺俗伝承人（人間国宝）」の称号を授けた。その後、儺俗「捉黄鬼」を行う間、彼の家も事務所となる。

儺俗「捉黄鬼」の演出は旧暦正月14日から15日までの2日間に及ぶ。演出の規模が広大で、結構、複雑である。村全体で仮面をかぶる者は50人以上、顔に隈取りをほどこされた者は600人以上に達する。

固義村には、以下のような物語が言い伝えられている。昔々、固義村に4人の兄弟がいた。1番下の四男は人徳がなく、いつも両親を虐待し、3人の兄に暴力をふるっていた。また、弱い者をいじめ、金品を盗むという悪事の限りを尽くすやぐざ者であった。四男は死んだ後、地獄に落ち、閻魔大王の前で裁判を受け、法に従って皮を剥がれて体の筋を引き抜かれた。固義村の儺俗「捉黄鬼」の中にでてくる黄鬼はその4人の兄弟の1人である。大鬼は1番上の兄、二鬼は次男、跳鬼は三男で、黄鬼は1番下の弟である。儺俗「捉黄鬼」の内容は大鬼、二鬼と跳鬼が黄鬼を捕らえるということをめぐる展開する。固義の村人たちにとって、黄鬼は邪悪のシンボルである。その上で、洪水・虫害・疫病などの災難も、黄鬼が災いしていると考えられる。黄鬼は特に両親を虐待する親不孝を指し、オーソドックスな儒学説が儺俗に浸透していることを反映している。鬼を追い払い邪気を鎮めるという「捉黄鬼」のプロセスは、人そのものを正し、道徳行為を導くものでもある。黄鬼を極刑に処したことで、固義村も疫病退散、家庭和楽、安寧長寿、天下泰平という世が実現されたことを表現している（張曉影 2008）。儺俗「捉黄鬼」の演出過程は下記の8つの段階がある。

①お神迎え（正月14日）

午前中、楼閣や寺廟などの重要な建物に春聯を貼って、畏敬や慶事の意を表す。それから、お神迎



写真3 春聯などで飾られた古い村道

⁽¹¹⁾えをし、村を守護する神様を廟から神棚に祀る。神々の中に歴史上実在する人物はもとより、物語に描かれた架空の神々も登場する（廣田律子 1998：80）。午後、ドレスリハーサルをする。全ての参加者は街を練り歩く。西大社、南王戸、東王戸、劉莊戸という順番で村を訪れながら2キロメートルの大通りを練り歩く、華やかな衣装の行列は壮観である。この日の夜、村民たちは夜通し寝ずに、顔に隈取りをしたり、試着したり、道具を整理したりして、翌日まで忙しく過ごす。

②邪気払い（正月15日）

明け方3時になると、まず3人か4人かの斥候は村の

通りを3周にわたり繰り返し見まわり、その後ろを100人ほどの隊列が続く。この間、氣勢を高めるために、爆竹を絶えず鳴らす。柳の棒を持った若者たちの案内で大鬼、二鬼も村道をパトロールし、村にいる邪悪なものを追い払う。

③鬼払い（正月15日）

午前8時になると、大鬼、二鬼と跳鬼の役を務める村民は、ひとえを着用し、気迫に満ちた勇ましい足取りで、柳の棒を手にした大勢の若者たちに取り囲まれ、玉の汗を流しながら、村中を練り歩き鬼を払う。のちに捕えられる黄鬼も、ようやく登場する。黄鬼はぶるぶると命からがら逃走するふりをし、大鬼と二鬼と跳鬼は三つ又、刃、手錠などをもって、黄鬼の後ろで捕まえるふりをする。この4人の役者は演出過程の中で繰り返し、全力で演技する。黄鬼の周りを取り囲んでいる何十人もの若者たちが柳の棒をもって、怒りの表情でにらみ、歯ぎしりをしながら「ワァォワァォ」と叫んで、柳の棒を高く差し上げて黄鬼を撃つふりをする。大通りでのこの演出は、4時間以上にも及ぶ。

④村中引き回し（正月15日）

正午12時になると、黄鬼はやっと捕らえられた。その瞬間は、人々は奮い立ち、絶えず爆竹を雷鳴のように鳴らしている。勇ましい大鬼と二鬼と跳鬼は、がっくりと肩を落とした黄鬼を連行しながら村中を引き続き引き回す。多くの若者が、柳の枝を振りながら大声で叫び声をあげてそれに加勢し、演技は再び山場を迎えた。

⑤裁判（正月15日）

固義村の南西の村外れには閻魔王用の舞台、審理・判決をする舞台と死刑を執行する舞台の3つの舞台が建てられている。閻魔王台と執行台は向かい合っており、裁判台は閻魔王台の左にある。大鬼と二鬼と跳鬼は黄鬼を連行し、村の中心部から村外れへ進行する。村外れに着いた後、大鬼と二鬼と跳鬼は黄鬼を裁判台に上らせ、裁判官は黄鬼の罪状を読み上げて死刑を言い渡す。その後、黄鬼は大鬼と二鬼と跳鬼に連行されて閻魔王台まで連れていかれる。ここでは、閻魔王は黄鬼の死刑を再審した後、罪状の事実として承認し、腸を抜き出し皮を剥くという刑執行を命令する。

⑥鬼殺し（正月15日）

大鬼と二鬼と跳鬼は、閻魔王から黄鬼に死刑を執行する命令を受け、執行台に黄鬼を連行する。黄鬼が執行台に連れて来られると、人々は興奮した。その時、煙を放ち爆竹を鳴らす担当の村民は、一斉に作業を開始する。濃い煙と天地を揺るがすような爆竹の音の中で、人間が邪悪を打ち負かすことの象徴として、大鬼と二鬼と跳鬼は、黄鬼の腸（実は鶏の腸）を何本も空に投げて、黄鬼がすでに極刑に処したことを表現する（黄鬼の役をつとめる人は濃い煙の中、舞台の中心につけたエスカレーターを利用して舞台の下に降りるが、幕で人々の視線を遮るため、その姿は人々からは見えない）。すでに、15時間ぐらいが過ぎて難俗の「捉黄鬼」は終わる。黄鬼が象徴するものは、親不孝、妻や目下の者を粗末にするなどの悪行である。実際に黄鬼を追い、処刑することで、これらの不品行を戒めたのである。



写真4 閻魔王が黄鬼の死刑を再審



写真5 執行台で黄鬼は極刑に処された

⑦農業神の祭祀（正月16日）

儺俗「捉黄鬼」の演目は終わったが、民間祭祀活動はまだ続く。正月16日、この日は農業を守る農業神を祭祀する儀式が執り行われる。午前8時ごろ、銅鑼や太鼓の演奏で、西大社の社首は仮面に被っている土地の神様、町の守り神様、地獄の裁判官、青鬼や五道神などの神官と一緒に固義村南の田畑で虫蟪王⁽¹⁴⁾を祭祀する。その後、固義村北の田畑で水雨竜王⁽¹⁵⁾を祭祀する。なぜ特別に農業神だけを祭祀するのかといえば、春の農耕初め、そして種まき、風水害、日照り、病害、収穫祭、次年収穫の予祝といった、何千年も昔から続いてきた北方人の生活リズムに合わせて、神々への祭祀も行われてきたのであるから、当然といえるだろう。

⑧お神送り（正月17日）

正月17日の午前、村民たちは14日に迎えた諸神様を元の所まで送り返す。このお神送りの儀式にも色濃く民間祭祀が表れている。諸神様の前にすえられた小さな神輿の前には、花、果物や肉などがいくつも供えられ、神官の祝辞を受けてから行列を組んで諸神様を神社境内へ戻す。その後に社首、神官、太鼓、鐘を担いだ男、村人などが続く。沿道からは饅頭や肉などを持った人々が神様を拝み供物を捧げる。神迎えの場所に着くと、神輿の中から諸神像を取り出して戻し、爆竹を鳴らす。年初にこの民間祭祀で諸難を断ち切り、1年間の無病息災と安全を願う正月の儀式である。

中国の儺礼の祭りは、神々への祭祀と芸能からなる。つまり祭祀は神々への信仰と密接にかかわっている。芸能の娯楽化が進むにつれ、祭りを維持するためには、人々の信仰が不可欠である（廣田律子 1997：179）。

Ⅲ 儺俗「捉黄鬼」遺産化の仕組みづくり

固義村の民間信仰を代表する儺俗「捉黄鬼」は完全な伝統祭儀で、文化的特色が濃厚である。民間の風俗は純朴で、村民は互いに助け合い、人々は和やかに付き合っている。これらは儺俗「捉黄鬼」が注目され、拡大され、遺産化される内在的な要因である。中国の無形文化遺産に関する保護事業は1949年以降、徐々に推進されてきた。60年代に文化大革命の間は迷信とされ息をひそめてきたが、近年、中国はほぼ全域にわたって分布が確認されている（廣田律子 2011：94）。特に90年代に入る

と、都市部における有形文化財だけではなく、農村部における「もともとの形」が溢れる原始形態の無形文化財が重要視されるようになり、1996年、中国とノルウェーは共同で中国西南部の貴州省に中国初の生態博物館を設立した。囲いのない「生きた博物館」として、文化遺産のリアリティと完全さ、原始性を保っているのが特徴とされている。その後、貴州、雲南、四川等少数民族の地域で文化生態保護区（村）の建設が進められ、生態博物館の成立を通じて、農村部における伝統文化、衣食住の他、精神世界の民間信仰が把握できるようになった（馮彤 2007：145-146）。特に改革開放が実施されたこの30年間に、中国の経済発展は大きな成功を収め、21世紀初頭に実施される無形文化遺産保護を含む文化建設のための、十分な国力を蓄積することができた。従って、中央から地方まで、現在進行中である無形文化遺産保護活動に対し、巨額の資金によってこれをサポートすることが可能となった（白庚勝 2008：38）。このように、全国無形文化遺産登録推進のブームの中で、2004年、儼俗「捉黄鬼」が武安市の市レベルの無形文化遺産リストに登録された。2005年、武安市政府の年度発展大会で、儼俗「捉黄鬼」を明確に保護するという戦略を定める。その年、さらに高い社会価値を求めるため、武安市文化館の杜学徳の提唱・参与のもとに、武安市文化館が協力し、その呼びかけに固義村の村民達は積極的にこたえた。

（1）儼俗「捉黄鬼」遺産化の目的

もともと儼俗「捉黄鬼」は、固義村の人々にとって、1年の終わりに疫や鬼を追い払うという意味を持つものであった。明朝時代から、疫や鬼を追い払うほかに、ゆく年を送り、くる年を迎え、民間では儼儀の世俗化の傾向がますます顕著になった。清朝以降、洪水・虫害・親不孝などの意味が付与されるようになった。民間信仰は各地の地域コミュニティでつむぐ伝統的かつ地方文化を強化する産物である。特に地縁による団体、或いは宗族のような血縁関係による民間の私的集団は、その結び付きの強化が必要な時に、地元の民間信仰の方面で、工夫されることがよくある（趙世瑜 2002：31）。今日、固義村の人々にとっては、儼俗「捉黄鬼」を行うのは無病息災、五穀豊穰、万民豊楽、天下安寧などの一般庶民の伝統的願望を表すものなのである。

政府や文化館など上級機関・組織では、このような活動を行うのは現地の民間文化を保護し、価値を高め、さらにその力を借りて、地元の経済の発展にも役立つようにとも考えられている。儼俗「捉黄鬼」を民間文化遺産として宣伝し、儼俗「捉黄鬼」などの一連の活動を民俗文芸のエキシビジョンと見做し、同時に、これらの民間信仰を借りて、全国的に主要な観光資源をも求めている。2004年、武安市政府は「八百里太行山水・七千年磁山文化」というスローガンを掲げ、特に伝統文化・民間信仰の面で、儼俗「捉黄鬼」を主として、伝統地方劇や、獅子舞、龍踊り、灯籠見物や、花車、旱船（船と漕ぎ手を模した民間舞踊）、高蹺（竹馬に乗って踊る）、ヤンコ踊り、武術、また銅鑼や太鼓の演奏などの民間芸能が、当地の重要な経済刺激策の一環として展開されている。

先にも述べたとおり、当地政府は儼俗「捉黄鬼」に対する無形文化普及の目的は既に明らかにさせていた。一方、固義村の人々も、何か良い結果が起きることを期待している。固義村は資源が乏しく、耕地はやせ、食糧生産水準が低く、供給と需給のギャップが存在している。発展のチャンスが十分でなく、地位も無視された。村落の数多くの旧跡や古建築、明清時代の民家邸宅と民間信仰を除くと、ほかの地方伝統文化としての資源はほとんどないので、掘り起こす必要がある。儼俗「捉黄鬼」

が北方の儺文化の代表として、国レベルの無形文化遺産リストに登録されれば、儺俗「捉黄鬼」の全国の知名度が上がるであろうことは皆の共通のコンセンサスである。従って、儺俗「捉黄鬼」はこのような流れで文化遺産化の道りをたどっている。要するに、遺産化を行う動機は、国家の無形文化遺産の保護政策の助けを借りて、民間信仰にも注目させ、さらにその文化価値を向上させることで、さらに多い資源を勝ち取り、観光を開発するという方法で、地元産業の発展と社会の繁栄を目指しているということである。

(2) 儺俗「捉黄鬼」遺産化の手段

固義村の村民生活の一部である儺俗「捉黄鬼」を、国家公認のナショナルな民俗文化符号や文化遺産に向上させるために、その儺俗「捉黄鬼」にそれ相当の価値や必要な文化を与えなければならない。しかも、その儺俗「捉黄鬼」を正統化、公開化、遺産化しなければならない。それでは、儺俗「捉黄鬼」が持っている文化遺産価値の部分がどのように注目され、どうやって昇華されたのか、村民たちの信仰の部分とはどのように結びつけられて、文化遺産という仮面の裏に隠されたのか、これらの問題について、次の3つの点から検討することにする。

① エキジビション

全国からの反響を得て、国レベル無形文化遺産に登録されるために、武安市政府や文化館、有識者の提唱により、もとは3年間連続して行った後で3年間の間隔を空けていた活動パターンは、毎年行うようになったようである。単純な民間信仰の行為から総合的で多種多彩な出し物が集まる民間芸能になったことで、エキジビションの性質を明らかに持つようになった。

まず、文化空間の公共化。以前、儺俗「捉黄鬼」を行う時には、村落の周りに建てられた楼閣が閉鎖されて、村落以外の知らない人の村への出入りは禁止されていた。今日、固義村以外の人が固義村に出入りするのを禁止するという規定は廃止されて、たくさんの観光客も活動に参加するようになった。例えば、武安市政府、文化局、宗教局、文化館、観光局、交通局、建設局、教育局などの政府機関の役人、また国、省、市レベルのマスコミの記者、大学の教職員と学生及びその他の社会人などもある。村落の民間活動は政府、マスコミ、学者と観光者も積極的に参加できる。

つぎに、娛神から娛人への変化。民間信仰の儺俗「捉黄鬼」はもともと厄災の払拭、五穀豊穡・豊作への御礼のために行われている芸能である。演者は、仮面、装束を付け、身振り手振りによる表現で演じ、台詞のない、無言劇であることも儺俗「捉黄鬼」の特徴の1つである。従って、これまでの単調だったものから、たくさんの観光客を引き付けるために、武安市文化館はどれも特徴のある素晴らしい多種多彩な出し物が、儺俗「捉黄鬼」が行われている間に催されるようになった。地域に密着した文化芸術活動に励み、文化協会主催事業や各団体事業等を行った文化館は、観光者や村民に広く生きがいや潤いを与えるために、儺俗「捉黄鬼」にも積極的に参加してもらった。特に上演の演目は、固義村の有識者や文化館の指導者により共同で決められる。彼らは言語、音楽、動作、上演内容などの面では主導権を持っている。地元文化の理解や観光者の好みに合うように、彼らはいくつかの地元の村民生活と密接な関係にある生活のシーンを選び、村民の現代生活にだんだん消えてなくなる生活のシーンを再現する。伝統地方劇や民間舞踊などの上演活動はもともとあったが、観光客が来た

ことによって、さらに外に向けた上演活動になっていった。

②登録の為の詳説

明確な説明をすることは文化遺産認定の重要な要素であり、その目的は遺産としての価値を掘り起こし、向上させることである。遺産化の記載提案書に、武安「捉黄鬼」は中国の最も古い文化行事のひとつで、「中国戯劇の生きた化石」または「中国舞踊のルーツ」といわれている。儺劇、儺踊りのいずれもが独特な美をはぐくみ、古代人類の生活や信仰のさまざまな形を再現している。儺儀の仮面はさらに勇敢な美、威厳のある美、醜さの中に秘められた美、慈善の美、安らぎの美、こっけいな美、ずるがしこさの中にある特有の美を存分に表現している。記載提案書には武安市の儺俗「捉黄鬼」の価値を2つの要点としてまとめた。まず、学術の価値では、固義村の儺俗「捉黄鬼」と儺戯において、「掌竹」という特殊な役がある。その役の人は、赤い着物をまとい、1メートル足らずの竹竿を握っている。公演では舞台の前方に立ち、歌詞を吟じながら、劇のあら筋を説明する。祭祀では、掌竹役の人は祭祀の詞を吟詠しながら儀式的司会をして祈禱師のような役を務める。戯劇専門家の黄竹三によると、掌竹は宋・元代の雑劇に記載されていた劇の引導者や前口上、演目の文句の吟詠者に似ているという。吟じながら歌われるそれは、古風で素朴な節回しであり、ほとんどが7字の文句で語呂を合わせて韻を踏むという特徴がある。掌竹は、伝統劇が吟詠から節回しへと移行する段階の生きた化石として、戯曲史の研究に生きた物証を提供している。一方、社会の価値では、中華民族の優秀な伝統文化を継承・拡大し、社会主義の精神文明の建設を促進させるのに有利である。また、村民たちの文化生活を広げ、国民の文化的向上に資することができ、世界文化の進歩に貢献する。武安市は中国の歴史文化名城として、儺俗「捉黄鬼」を武安文化のブランド化を図ることができる。記載提案書の説明から見れば、儺俗「捉黄鬼」の文化価値の詳説は、長い歴史をもつ民間信仰の儀礼を優秀な民族文化と同列に扱う。記載提案書は村民たちが自分の言語で概括を説明しようとしてもどうしても無理だろう。記載提案書の執筆者は、ユネスコの無形文化遺産の評価基準を参考にしながら、儺俗「捉黄鬼」の実態に照らし合わせて書くだらうことは明らかであるし、これらの詳説は儺俗「捉黄鬼」の遺産化に大事な役割を果たすことも明らかであろう。

③多文化の融合性

同じ地方のいろいろな無形文化遺産を併せて申請することによって、資源を融合する方法がますます一般的になった。この方式の最大の利点は、もともとの構造を破壊しないという前提で、その地方の各種の文化遺産を全面的に保護できる点である。それにより、その地を広く知らしめることができ、政府の評価も上げることができる。当地政府が民間活動に関与することで、様々な文化的要素を取り入れることができるようになった。学者によると、現代では、民間信仰の活動は単一の祭祀活動から原始祭祀、農業耕作、民族集会、娯楽交際や文化展示などの総合的な文化活動に発展していくことがしばしばある（楊甫旺 2003：1）。儺俗「捉黄鬼」の遺産化もこのやり方を具体的に表している。儺俗「捉黄鬼」は固義村では厳かな儀礼活動であるが、文化遺産として登録するためには、それだけでは市・省にある他の民間信仰活動より、少し弱いように見える。しかし、地元の各種の文化を併せて申請すれば、登録される可能性が大幅に増えるうえに、民間信仰として申請のリスクを避ける

こともできる。そのようなことから、儺俗、儺戯や賽戯などの儺儀礼に関する諸文化と一緒に、記載提案書に記入した。

先に論じたように、様々なものを融合させ、儺俗「捉黄鬼」の遺産化を再構築することで、再びこの民間信仰活動を民族の特色や地方特色がある伝統文化として人々に注目させた。遺産の価値がさらに強調されて、儺俗の学術や社会の価値を体现できる部分を誇張し、強化して、民俗的な地方性の伝統文化をイデオロギー上から解釈して再述しなおし、儺俗「捉黄鬼」を迷信や低俗のレッテルあるいはその地位から抜け出させ、閉鎖的な環境で保存されていた地方文化を貴重な文化遺産に昇進させた。

IV 構築されて文化遺産になった儺俗「捉黄鬼」

儺俗「捉黄鬼」の効果や目的の明確化によりその祭祀内容の調整も決められ、その活動は隠蔽されていたものから公開化され、広域化される。地元の村民たちに伝統文化や娯楽の舞台を提供すると同時に、観光客の見物や参加の準備をも整えた。儺俗「捉黄鬼」の正統性や合理性を強調するために、その文化的意味が再び認識された。黄鬼が象徴するものは親不孝、妻や目下の者を粗末にするなどの悪行であるほかに、干ばつ、長雨などの気象災害や飢饉・伝染病などの災難も、黄鬼が災いしていると考える。実際に鬼を追い、処刑することで、これらの不品行を戒めて、すべての災難を駆除することを目的としている。

上述したとおり、儺俗「捉黄鬼」の文化の原始性は保たれたままであるが、文化遺産化や文化多様性の背景下で、その内容と形式の変化は顕著である。民間信仰はさらに開放され、新たな意義が与えられた。綿密な計画をしてから、儺俗「捉黄鬼」に民間信仰、民族舞踊、伝統芸能、古典戯劇、論理道德などの多方面から様々な要素が加えられて、中華民族の伝統文化の芸術的な要素を吸収し、蓄積した。民間信仰と文化遺産という2つの概念は、ある意義から見れば対立している。文化遺産は現代的な概念として、国家を頂点とする公共機構を後ろ盾とするということは必要であるが、民間信仰は決して国家と連繫する必要はない。長い歴史上の伝統として、日常生活の様々な面から人々の経験の中に浸透されてきたものである（桜井龍彦 2010:2）。従って、儺俗「捉黄鬼」は文化遺産登録のために、特別な準備をしなければならない。さらに、その価値を明らかに示すことも重要である。

V おわりに

儺俗「捉黄鬼」は各方面の力を借りて民間信仰の形式で、地方伝統文化を代表して、第一回国レベル無形文化遺産リストに登録された。人々は自分たちにとってはごく普通の民俗活動であったが、遺産化を通じてさらに多くの資源の活用を希望した。遺産化される過程で、エキジビション、登録の為の詳説及び多文化の融合性などの方式を通じて、もともとの儺俗「捉黄鬼」の要素を改めて取捨して、たくさんの新しい要素を取り入れ、「捉黄鬼」に代表される儺文化の優位性と価値を明らかに示した。このことからわかるように、儺俗「捉黄鬼」の遺産化の過程は遺産を構築する過程そのものである。儺俗「捉黄鬼」の遺産化の目的と手段を前述したが、どのように遺産化がなされるのだろうか、誰かが遺産を構築するのだろうか。

民間文化は政府に管理されている。どのように民間から民族、国家そして世界レベルにまで高めるのか、それには特殊な得難いチャンスが必要である。21世紀の無形文化遺産保護のブームはそれを実現するよい機会であった。このような背景もあり、地方政府は儺俗「捉黄鬼」を行うことに寛容であり支持する態度を持っている。村民たちは儺俗「捉黄鬼」活動について、遺産化させたという認識は全くない。素朴な民俗心情を持つ彼らは活動の主体として参加していたが、この活動を彼ら自身で遺産化させるということは難しかったので、この邯鄲市の出身者である市文化館の杜学徳が彼らの代表で行った。有識者の目には、儺俗「捉黄鬼」は、人々が幸福を祈って心を慰める方法として再認識し、村落の人たちとの団結を強固にし、また、人々の心が集まる場としてだけでなく、利用可能な文化資源として伝統文化を伝える場でもあり、固義村を広く知ってもらうための1つの窓口として映った。

当地政府の文化部門は、遺産化の過程で主力陣として計画者の役割を担い、たくさんの有効な措置を講じた。政府の年度計画は儺俗「捉黄鬼」を重要事項として扱い、毎年開催されるように資金を支援すると同時に、関係する指導者も祭祀活動に出席し、政府はこの民間信仰を認可し、支持することを明らかに示した。今日の儺俗「捉黄鬼」の参加者は村民だけではなく、政府役人、マスコミ、観光客、学生と学者、また他の村の村民なども積極的に参加している。いくつかの力が重なることで、その儺俗「捉黄鬼」の内容ももっと豊かになり、より複雑になった。言いかえれば、民間文化の変遷は外部からの様々な力が作用した結果といえるかもしれない。

さらに考えなければならない問題は、文化遺産を主体となって保護しているのは、一体だれなのだろうか。儺俗「捉黄鬼」の保護単位は記載提案書に「市文化館」と書いてあり、これはとうてい納得できることではない。固義村の社首と村民たちのことを、政府部門は逆に保護する対象とした。私達が疑問に思う点は、文化館が毎年固義村に人を派遣して練習を指導するということが保護することなのか、文化館が仮に関与しないとなると儺俗「捉黄鬼」は民間で保護できないということなのか、どうして保護されないのか、民間信仰は本当に保護が必要なのか。文化館に指導された儺俗「捉黄鬼」を現代版の代表とすれば、文化館に指導されない儺俗「捉黄鬼」は伝統版の代表である。そういえば、ここは2つの儺俗「捉黄鬼」があり、1つは民衆の日常生活の儺俗「捉黄鬼」であり、もう1つは無形文化遺産リスト中の儺俗「捉黄鬼」である。両者はぴったり重なり合うのではなく、いくつかのところは交差しているが、目標や認識、実際の効果という点では区別がある。従って、無形文化遺産リストに登録された遺産はもはや民衆の日常生活における遺産ではないということであり、そうなれば、政府の保護行政はまだ意義があるのだろうか。これは、我々が反省しなければいけない点だろうと思う。

注

- (1) 県級市は、中国の行政区画の単位で「県」と同じ区分にある市である。中国においては1980年代以来、工業化の発展と都市化に随い、大多数の「市」が県を廃して置かれた。中国の県は日本の市に相当する。
- (2) 洪洞県は、山西省南部でも人口の多い県である。明朝では洪武初年から永楽15年までの50数年間で、経済は繁栄し、人口が増えた洪洞から、河南省や山東省など中原の各省への大規模な移民が8回行われた。
- (3) 張家口は、河北省西北の山間の盆地に位置する県級市である。その管轄下の蔚県と涿鹿県の境にある小五台山山地は太行山脈の北部に当たり、その主峰・東台は2882メートルの高さとなり、河北省の最高峰で

ある。

- (4) 上党は、秦代から隋代にかけて山西省に設置された郡である。おおよそ現在の長治市を中心とする山西省南東部に相当する。
- (5) 杜学徳は、邯鄲市民間文芸家協会主席、元邯鄲市群芸館（文化館）館長、民俗学者であった。地元の武安雛俗の研究に没頭した。著書『武安雛戯（武安仮面劇）』。
- (6) 邯鄲市は、河北省南部の都市である。戦国時代の趙の首府であり、日本ではとりわけ「邯鄲の夢」、「邯鄲の歩み」の故事が有名である。
- (7) 賽戯は、中国の北方で流行し、宗教祭祀から発展した伝統地方劇の1種である。簡単な演技、単純な筋書き、登場人物の少なさとシンプルな曲などが基本的な特徴である。
- (8) 張衡（78-139年）は、中国東漢（後漢）の文人・天文学者である。東京（洛陽）と西京（長安）を詠んだ二都賦が文選にも収録されている。
- (9) 社火節は、正月期間中、特に元宵節前後に中国の北方で行われる民間の娯楽活動である。社火節の「社」は土地の神、「火」は火の神を指し、その起源は土地と火の神に対する崇拝である。
- (10) 社首は、社の中での活動を担ういくつかの家庭で構成される単位である。社は農村の居住の地理的条件によって祭神と娯楽を行う地縁集団である。
- (11) 春聯は、中国で、正月にめでたい文句を赤い紙に書いて門口に張るものである。
- (12) 青鬼は、閻魔王にかしづく鬼である。
- (13) 五道神は、中国民間の神の名。死者の魂を閻魔王のもとに護送する神である。
- (14) 虫螭王は、すべての昆虫を管理し、農作物を守護する中国民間の農業神の1つである。
- (15) 氷雨竜王は、降雨を主管する中国民間の農業神の1つである。

参考文献

日本語の文献

- 梶谷真司 2004 「文化的アイデンティティとグローバリゼーション——社会現象学的考察」『帝京国際文化』第17号 pp.121-152
- 魯忠民 2007 「河北省・武安市農村の鬼払い祭り——「捉黄鬼」（人民中国インターネット版）」2007年12月11日発表 人民中国Homepage (<http://www.peoplechina.com.cn/>) (2012年12月現在)
- 白庚勝 2008 「中国の無形文化遺産保護」『第30回文化財の保存・修復に関する国際研究集会報告書』pp.35-40
- 馮彤 2007 「中国の無形文化財の保護に対する一考察」『北東アジア研究』第13号 pp.137-147
- 廣田律子 2011 『中国民間祭祀芸能の研究』 風響社
- 廣田律子・余大喜〔編〕王汝瀾・夏宇継（訳）1997 『中国漢民族の仮面劇』 木耳社
- 田耕旭〔著〕李美江（訳）2004 『韓国仮面劇』 法政大学出版社
- 廣田律子 1998 「中国の仮面芸能」『芸能と祭祀』 勁草書房
- 廣田律子 1997 『鬼の来た道——中国の仮面と祭り』 玉川大学出版部

中国語の文献

- 徐贛麗 2010 「民間信仰文化遺産化之可能——以布洛陀文化遺址為例」『西南民族大学学报』第4巻 pp.30-36
- R. M. Keesing 〔著〕劉文遠・王威（訳）1988 「象徴人類学」『世界民族』第6巻 pp.19-26
- 岩本通弥 2010 「民間信仰の文化遺産化のアポリア——日本の事例を中心に」『文化遺産』第2号 pp.105-114
- 杜学徳 1994 「冀南固義大型雛戯「捉黄鬼」述略」『民間文学論壇』第3号 pp.75-79
- 武安県誌編纂委員会 1984 『武安県地名誌』 河北省武安県誌編纂委員会

- 李少林 2006 『中華寺廟』 内モンゴル人民出版社
- 黄竹三 1987 「我国戲曲史料の重大発見——山西潞城明代「迎神賽社礼節伝簿四十曲宮調」考述」『中華戲曲』第3巻 pp.137-145
- 王福才 1995 「河北儺戲「捉黄鬼」源於山西上党賽社考」『山西師範大学学报』3号 pp.47-49
- 杜学德 2006 「武安固義村迎神祭祀暨社火儺戲」『邯鄲地区民俗輯録』天津古籍出版社 p.50
- 秦佩 2008 「固義儺戲と賽戲の研究」(河北師範大学修士論文)
- 杜学德 1994 「冀南固義大型儺戲「捉黄鬼」述略」『雲南儺戲儺文化国際学術討論会論文集』
- 張曉影 2008 「揭秘武安几千年的大型民間社火活動「跑鬼」戲」『石家莊日報』3月9日掲載
- 趙世瑜 2002 『狂歡与日常：明清以来的廟会与民間社会』三聯書店
- 楊甫旺 2003 「民族伝統節日の共生，伝承和転型——彝族賽装節个案研究」『貴州民族研究』p.1
- 桜井龍彦 2010 「応如何思考民間信仰与文化遺産的關係」『文化遺産』p.2